

述部外成分と文頭の談話機能

Yayoi Nakamura-Delloye

▶ **To cite this version:**

Yayoi Nakamura-Delloye. 述部外成分と文頭の談話機能. 日本語文法学会第１６回大会 [The 16th Annual Meeting of the Society of Japanese Grammar], Nov 2015, Tokyo, Japan. ⟨hal-01419933⟩

HAL Id: hal-01419933

https://inalco.hal.science/hal-01419933

Submitted on 14 Oct 2019

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

述部外成分と文頭の談話機能

デロワ中村弥生
フランス国立東洋言語文化大学（イナルコ）日本学部
Institut national des langues et civilisations orientales (INALCO) Département Japon

０. はじめに

本発表では、日仏語対照研究の視点から、日本語文における基本構造である題述関係の外にある成分を述部外成分と呼び、その機能付与における文頭の役割を考える。

１. フランス語学における述部外成分と文頭

フランスにおける伝統文法では、文は主語と述語で構成されると言われ、それ以外の要素の存在について言及されることはなかった。しかしながら現代のフランス語文法においては、主語–述語の関係で構成される文の核構造の外にある要素（核構造全体に係っていくと考えられる要素）の存在が広く認められている。これらの要素は、述部外成分（éléments extra-prédicatifs）などと呼ばれ、主題、呼びかけ、文の副詞、そして接続語や談話フレームインストーラー（Charolles 1997）などの談話構成に関わる様々な要素が含まれる。ル・ゴフィック（Le Goffic 1993）は、文頭を「発話者にとって、自身の発話における、制約の多い統語関係のネットワークに入る以前の比較的自由な領域」（拙訳）としており、述部外成分の最も現れやすい位置を、核構造の頭となる主語やQUワード（英語のWHワード）の左側の文頭であると言っている。また、述部外成分の多くはカンマやポーズなどの区切りで核構造とは独立した形で現れると言われ、このような独立性の高い成分をその出現位置やスコープも含め体系的に記述する試みが盛んである（Combettes 1998など）。

２. 日本語における述部外成分と文頭

日本語では、一般的に独立語、接続語と呼ばれる文の成分が述部外成分であると言えるが、これらの他にどのような要素があるのか。この問いの答えを求め、コーパスで用例を集めて分析を行うこととした。まず、ル・ゴフィックのいうように文頭が発話者にとって比較的自由な領域であるということは普遍性の高い事実であるという仮定のもと、日本語文における主題以前（左側）を述部外成分の最も現れやすい位置である文頭と定義した。そして、文中で最初に現れた格助詞を含まない「ハ」句を主題とし、その前に現れた動詞句を含まない要素を分析の対象として

用例を集めることとした。新聞記事と小説[1]からこれらの条件に該当する１５０の用例を採集し分析したところ、以下の要素が観察された（カッコ内は採取された要素の文法カテゴリーを示す)。

① 独立語（名詞句）
② 接続語（接続詞、および特に指示詞を伴った複合語）
③ 文の副詞、評価成分（cf. 工藤 1997）
④ 時や場所を表す補語（名詞句、または格助詞句）
⑤ その他の格助詞句または格助詞句相当の要素

上の結果から、述部外成分といっても、文の核構造に入ることのない一種の特別なカテゴリーの語があるわけではなく、同一の成分が述語の補足成分となったり、述部外成分となったりしている様子がうかがえる。やはり述部外成分の機能付与には文頭という位置の役割が大きいと思われる。この述部外成分と文頭の関係は、工藤（1997）にも見られる。工藤は、まず「親切に」は、はだかで修飾用法(1)、「も」を付加して述部外機能となる評価用法(2)、と二つの用法が可能であるとしている。（例1、2、3は工藤（1997）より引用）

(1) 太郎は、地図を書いて、道順を親切に教えてくれた。
(2) 太郎は、親切にも、地図を書いて道順を教えてくれた。
(3) 親切に（も） かれは 道を ていねいに 教えてくれた。

しかしながら、「親切に」を文頭に置いた文(3)では「も」はカッコ付けとなっており、少なくともこの文では述部外機能は「も」により付与されているのではなく文頭という位置付けにより付与されていると解釈できる。

以下では、上述の主題以前（左側）に現れた要素の中から、特に日本語文法でこれまで述部外成分として言及されることの少なかった④⑤に注目したい。

３.文頭に現れる時空間を表す補語

時の補語は、はだかの名詞句またはニ格助詞句によって形成される。格助詞「に」を伴った場合と伴わない場合との違いはすでに広く研究されており、佐伯（1998）ははだか名詞句はニ格助詞句よりも広く係り、ニ格助詞句に先行すると指摘している。格助詞は述語との関係を示すものであるため、格助詞句が述語に近い場所に現れ、述部内に係っていくというのは理論に適った現象であると言える。ただ、我々は格助詞の有無だけでなく出現位置に注目し、特に文頭に現れる時の補語

---

[1] 読売新聞 2006 年５月に https://db.yomiuri.co.jp/bunshokan/に掲載された抜粋記事（約 22 万字)、および以下の小説３作品から用例を採集した。
村上春樹『風の歌を聴け』、筒井康隆『エディプスの恋人』、藤原正彦『若き数学者のアメリカ』

を談話フレームインストーラー（Charolles 1997）と考える。シャロルは言語学的談話分析の目的を結合性を保持するための文法手段の記述と位置づけ、これらの文法手段には、談話単位マーカーと談話単位間の関係を示すものの二種類があるとしている。そして、談話の単位として談話フレームを提案している。談話フレームは、フレーム内の節や文すべてに共通する背景を設置することで結合性を保持する。シャロル（Charolles 1997）は、談話フレームを設定するインストーラーとなる一連の表現を記述しているが、その代表が時と場所の補語である。日本語ではこれまで、談話の単位として段落のほかに段、文段、話段（永野 1986、ザトラウスキー1991、佐久間 2003）などが定義されてきた。また、井上（2009）は話題、話法による結合で形成される単位や「のだ」「からだ」による結合で形成される単位などを提案しているが、時や場所の補語による結合で形成される単位についての言及はないようである。

(4) **小さい頃**、僕はひどく無口な少年だった。[…]
(5) **14歳になった春**、信じられないことだが、まるで堰を切ったように僕は突然しゃべり始めた。

[村上]

上の例は、小説の章の頭に出てきた件であり、「小さい頃」というインストーラーでフレームを設置した文(4)のあと、「小さい頃」を描写した文がしばらく続く。その後、(5)が現れ「14歳になった春」というインストーラーにより古いフレームは閉じられ、新たなフレームが設置され、背景が大きく変換されている。同じ時の補語でも文頭でない場所に現れるとフレームインストラーとしての機能は持ちづらくなるようである。

(6) 僕は**以前**、人間の存在理由をテーマにした短かい小説を書こうとしたことがある。
(7) 結局小説は完成しなかったのだけれど、その間じゅう僕は人間のレーゾン･デートゥルについて考え続け、おかげで奇妙な性癖にとりつかれることになった。全ての物事を数値に置き換えずにはいられないという癖である。
(8) **約8ヵ月間**、僕はその衝動に追いまわされた。
(9) 僕は電車に乗るとまず最初に乗客の数をかぞえ、階段の数を全てかぞえ、暇さえあれば脈を測った。

[村上]

(6)の「以前」が時のフレームを設置し(7)を取り込んでいるとは考え難い。しかし(8)では「約８ヵ月間」という時のフレームが設置され(9)を取り込んでいることは明らかである。

次の例は、文頭に場所の補語が現れた例である。

(10) **帰り道**、僕は車の中で突然、初めてデートした女の子のことを思い出した。

［村上］

ここでの「道」は佐久間（1940）が吸着語と呼んだ用法であり、格助詞を伴わないはだか名詞句のまま補語を形成しインストーラーの役割を果たしている例である。「車の中で」という場所の補語が後ろに現れており、時の補語に近い働きをしているものと考えられる。格助詞「で」を伴った純粋な意味での場所の補語が文頭に現れた例を採取することはできなかったが、抽象化された意味での場所を示した「で」格助詞句が文頭に現れた例は新聞記事から多く採取された。

(11) **耐震強度偽装事件で**、警視庁などの合同捜査本部は１７日午後、開発会社「ヒューザー」（東京都大田区、破産手続き中）の社長・小嶋進容疑者（５２）を、神奈川県藤沢市の分譲マンション「グランドステージ（ＧＳ）藤沢」を巡る詐欺容疑で逮捕するとともに、「木村建設」（熊本県八代市、破産）元社長・木村盛好容疑者（７４）ら２人を、「サンホテル奈良」（奈良市）の工事代金の一部をだまし取った同容疑で再逮捕した。

(12) 捜査本部は、代金が振り込まれる前に、３容疑者が建物の強度不足を認識していた点を重視。重要情報を顧客に伏せたまま代金を受け取った行為は「不作為の詐欺」にあたるとして、詐欺罪を適用できると判断した。

［読売］

(11)は記事の第１文であり、「耐震強度偽装事件」に関するこの記事において全体を取り込むメインフレームを冒頭で設置していると考えられる。

(13) **専門家会合で**　米側は35の食肉処理施設を対象に行った再点検の結果などに関する報告書を説明した。

(14) 日本側が求めていた輸入再開の条件については、〈１〉日本の検査官による施設の輸入再開前の査察を認める〈２〉輸入再開後にも米側が施設の抜き打ち検査を行い、この検査に日本の検査官の同行を認める―などに応じることに前向きの姿勢を示した。

(15) 日本側は米側の報告書について「一部の施設で手続きや書類上の問題点が確認されたが、製品の許容性や利用可能性に影響を及ぼすものではなかった」として、大きな問題はないとの判断を示した。

［読売］

(13)はテキストの第１文ではなく、ここでは「専門家会合」も「米側」もすでに与えられた旧情報である。フレームインストーラーの「専門家会合で」はこの後の(15)まで係っていくが、主題である「米側」は、対比的な主題「日本側」が現れる(15)の前、(14)までがスコープとなる。フレームインストーラーが主題よりも広域に係

っていくことをよく示した例である。

４.文頭に現れるその他の要素

これら時空間フレーム以外のフレームを設置するその他の格助詞句あるいは相当句のインストーラーも採取された。

(16) **同署によると**、豪憲君は１７日午後３時ごろ、同級生４人と下校。同２５分ごろ、自宅から約８０メートルの三差路で、最後まで一緒にいた同級生１人と別れた。

［読売］

(17) **新制度について**、内閣官房幹部は「履修証明を制度化して、信頼性を高めることにより、企業が人材を採用する際の基準の一つにしたい」と期待している。

［読売］

(18) 彼女がテーブルを片付けてその上に真白な食器を並べている間､僕はワインのコルク栓を果物ナイフの先でこじ開けていた。**ビーフ･シチューの湿っぽい熱気で**部屋の中はひどく蒸し暑かった。

［読売］

(16)の「～によると」といった表現は、シャロル（Charolles 1997）によれば発話フレーム（cadre d'énonciation）を設定すると言われている。また、(17)の「～について」は、主題フレーム（cadre thématique）のインストーラーと考えられている。(18)の「～で」は、原因・理由の補語と考えられ、質的領域（domaine qualitatif）のフレームインストーラーと考えられるが、この用例ではフレームを設定しているとは考えにくく、他の用例を分析し検証を重ねる必要があると言える。

他にもヲ格助詞句、ガ格助詞句など述部外成分とは考えにくい要素も文頭に出現することが分かった。そのため､『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いてさらに格助詞句に特化した分析を行ったところ表１のような結果が得られた[2]。デ、ニ、カラ句が多いのは、やはり他の格助詞句よりも述部からの独立性の高い補語を形成しやすいことによるものと考える。しかしながら、これらの用例からフレ

格助詞	が	を	で	に	へ	から
出現数	2	24	53	44	1	7
正規化値	0,0084	0,0778	**0,3989**	**0,1230**	0,0681	**0,1537**

表１　文頭に現れる格助詞句

[2] 検索は「ハ名詞句に先行する格助詞」という形で行い、その結果得られた 3676 用例から「文頭に現れる格助詞句」という条件に適った 132 用例を人手で採集し、これらを分析の対象とした。また、その出現数をコーパス全体における頻度（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位語彙表 ver.1.0）を用いて正規化した値も示した。

ームインストーラーといった機能以外にも全く別の談話構成上の論理でこれらの格助詞句が文頭に現れることがうかがえる。その一つが指示語が付加された場合である。

(19) **その速さに**元八郎は愕然とした。

[BCCWJ]

また文頭のヲ格は引用節と等価的なコト節を受けている場合が多く、長い成分を前に出す傾向によるものと言える。

(20) **学校をゆとりある空間にすることよって子供達の個性を伸び伸びと発揮させる、というようなことを**文科省は、提唱しています

[BCCWJ]

指示語の存在や成分の長さが語順に影響を与えることはすでに佐伯（1960）や野田（2000）で指摘されている。野田（2000）は、長い成分を前に置くのは統語関係をより明確にするための認知的な理由によるものとしている。しかしながら、以下のような例も上述の解釈で十分であろうか。

(21) **昔、あれほど忌み嫌い憎んだ宿題を**この連中は、要求しているのだ。

[藤原]

(22) **女子大生だという七瀬の身分に**彼は、半信半疑であった。

[筒井]

(23) **皇室で使われている御料牧場でとれた牛乳が**雅子妃は、どうも苦手のようで市販の牛乳を飲まれている。

[BCCWJ]

述語の項が文頭に出る現象はフランス語においても研究が行われており、プレヴォ（Prévost 2003）は焦点化による説明を試みている。日本語においても多くの用例において焦点化による解釈や排他読みが可能とも考えられるがこれらの議論は別の機会に譲りたい。

５．主題、対比、談話フレーム

今回シャロルの談話フレームを日本語の分析に応用し、日本語でも文頭という位置付けがフレームインストラーとしての機能を付与しているという提案を行った。実は談話フレームの日本語分析への応用はすでにクリングラー（Klingler 2003）にも提案されているが、クリングラーは、助詞ハが名詞句に伴った場合に主題を形成し、格助詞句に付加された場合にフレームインストラーを形成するとした。では、このクリングラーの仮説によると次の文はどのように完成されるべきなのか。

(24) 花子は少し散歩でもしようと家を出た。アパートの下（　　）、花子は郵便配達のおじさんに出くわした。おじさんは大きな包みを抱えていた。花子はおじさんに「お手伝いしましょうか」と声をかけた。

(25) 花子は少し散歩でもしようと家を出た。アパートの下（　　）、男が

通りを行ったり来たりしていた。薄い霜の層が地面を覆っている。子供達はじゃれ合いながら家路についていた。

上の例文は、シャロル（Charolles 2003）で用いられた仏語例文の拙訳である。シャロルによれば、(24)において「アパートの下」はフレームインストーラであり、単に背景を設定しているにとどまるが、(25)では後に続く文がそれについて何か述べるという主題を形成しているとしている。その解釈でクリングラーの仮説に従って空欄を埋めるならば(24)には「では」を(25)には「は」を入れなければならない。しかしながら、日本語母語話者を対象に行った調査ではほぼ100%の人が(24)に「で」を9割近い人が(25)に「では」を入れるとしている。ここでは「アパートの下で」という状況語は単に文頭という位置付けにより述部外成分となり、フレームインストーラとしての機能が付与されていると考えられる。

また、(24)(25)のどちらの回答においても「は」を入れるとした人はゼロであった。では、シャロルがフレーム機能を備えた主題としている(25)の文頭語に、日本語で主題マーカーとされる「は」ではなく「では」が付加されるのはなぜか。ここでも助詞ハの機能は何であるのかという疑問にぶつかる。おそらく日本語学において今日ほぼ共通認識と言えるハの対比の機能が作用しているのではないだろうか。文頭に現れる場所の状況語はデ格助詞句（例えば「日本で」）が談話フレームを設置するのに対し、さらにハが付加された要素（例えば「日本では」）は対比空間フレームを設置すると考えられるのではないか。スコープも対比フレームは標準フレームの範囲よりも狭いと考えられる。またあるいは、シャロルだけでなくル・ゴフィック（Le Goffic 1993）やプレヴォ（Prévost 2003）が主張するように、フレーム機能を備えた主題（あるいは主題性を帯びたフレーム）や部分主題という概念が有効となるのかもしれない。確かに、デハ句が文頭の状況語を形成している場合、他の主題が続くということは少なく述部全体が新情報であることが多いようである。しかしながら、おそらくここでも主題と対比の境界は曖昧なものであろう。残念ながらこれらの疑問の解決には、今後も多くのデータを分析し検証していく必要がある。

6. 結び

フランス言語学において文頭の機能付与における役割の研究が盛んであることから、日本語の文頭語と述部外機能との関係について考えた。フランス人言語学者シャロル（Charolles 2003）の研究を応用し、日本語文の文頭に現れる時や場所の状況語を談話フレームインストーラーとして分析することを提案した。今後は、文頭の状況語におけるハの有無といった文法的手段や形式と、談話フレーム、主題、対比などの機能との対応を明らかにして行きたい。フランス語では主題や対

比を明確に示す形態統語的手段がないため、談話フレーム、対比、主題といった機能の分析は文脈からの解釈が最大の判断材料となり、その境界については多くの研究者が議論している。文頭の状況語に関しても、はだか句、ハ句、格助詞句、格助詞＋ハ句といった複数の文法手段を有する日本語の研究から発見、提案できることは少なくないように思う。

参考文献

井上和子（2009）『生成文法と日本語研究』大修館書店

工藤浩（1997）「評価成分をめぐって」『日本語文法―体系と方法』ひつじ書房

佐伯哲夫（1998）『要説日本文の語順』くろしお出版

佐久間鼎（1940）『現代日本語法の研究』厚生閣（改訂版：厚生社厚生閣 1952）

佐久間まゆみ（2003）「談話における「段」の統括機能」『文章・談話』朝倉書店

ザトラウスキー，ポリー（1993）『日本語の談話構造分析』くろしお出版

永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店

野田尚史（2000）「語順を決める要素」『言語』29、9

CHAROLLES, Michel. (1997) L'encadrement du discours : univers, champs, domaines et espaces. *Cahier de recherche linguistique*, 6 :1-73.

CHAROLLES, Michel. (2003) De la topicalité des adverbiaux détachés en tête de phrase. *Travaux de Linguistique*, 47, 11-49.

COMBETTES, Bernard. (1998). *Les constructions détachées en français*. Gap, Paris : Ophrys.

KLINGLER, Dominique. (2003). Spécificité du dispositif créé par le marqueur *wa* en japonais comparaison avec le français. *Travaux de Linguistique*, 47, 163-179.

LE GOFFIC, Pierre (1993) *Grammaire de la phrase française*. Paris : Hachette.

PRÉVOST, S. (2003). Les compléments spatiaux : Du topique au focus en passant par les cadres. *Travaux de Linguistique*, 47, 51-78.